田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２３年０６月１５日更新分

■　タカ派寄りの米当局に市場はやや懐疑的！？

６月の米連邦公開市場委員会（ＦＯＭＣ）を通過し、参加メンバーらの金利見通しが中央値で５．６％まで前回から大幅に引き上げられていたにも拘らず、なおもドル／円は１４０円前後の水準でもみ合う展開を続けている。

左図に見るとおり、ドル／円の週足ロウソクは依然、一目均衡表の週足「雲」上限（現在は１４０．６５円）にガッチリと上値を押さえられ続けており、週末の終値時点でもレジスタンスとして機能し続けるかどうかが一つの注目ポイントとなる。

ドル／円の上値が押さえられ気味になったのは、ＦＯＭＣの前に発表された５月の生産者物価指数（ＰＰＩ）が事前予想を下回る結果であったことが一つには大きい。また、米連邦準備理事会（ＦＲＢ）のパウエル議長が会見でタカ派色を抑えた発言をしていたことにもドルの上値を押さえる一因となった。

さらに、議長が今回の政策金利据え置きに関する発言のなかに「スキップと呼ぶべきではない」というワードを盛り込んだことにも市場は敏感に反応した模様。なかには「スキップでないというのは、今回で打ち止めとなる可能性もあるということか」と勘繰る向きもあったようだが、これはパウエル議長が「スキップと言い切ってしまうと、将来の追加利上げは確定的との印象を市場に与えてしまう」と考えたためであろう。

それにしても…米金利予想の中央値が５．６％というのは、個人的にちょっと驚きであった。計算上あと２回の追加利上げがあり得るということになるが、そこには市場も疑心暗鬼なところがいまだあるようで、正直、筆者も大いに懐疑的である。

後になって追加利上げを実施するぐらいなら、今回も前倒しで実施しておいた方が政策的には有効であろう。政策対応が後追いになるのは“宿命”ではあるのだが、極力遅れないようにすることが肝要である。それでも「一旦利上げ見送り」としたのは、インフレが着実に鈍化傾向を辿っていることを示すデータが少なからず出てきたからである。

とまれ、ＦＯＭＣメンバーらによるタカ派寄りの見解に市場が歩み寄るようになるかどうかは、やはり今後のデータ次第ということになる。つまり、個々のデータに対する市場の受け止め方次第で、まだドル／円には上値余地が残されており、場合によっては前記の週足「雲」上限を上抜ける可能もあるということ。

あらためて週足チャート（上図）を眺めてみれば、現在、ドル／円の３１週移動平均線（３１週線）は上向きに転じてきており、週足の「遅行線」は２６週前の水準を上抜けている。つまり、テクニカル分析上は強気のシグナルが灯っているわけであり、仮に週足「雲」を上抜ける展開となった場合には、昨年１０月高値から今年１月安値までの下げに対する６１．８％戻し＝１４２．４５円あたりまで上値を伸ばす可能性もあると見る。

なお、欧州中央銀行（ＥＣＢ）は本日の定例理事会で利上げ実施を決定すると見られているが、市場では「ユーロ買いの反応は限られる」と見る向きが少なくない。このところユーロ圏の情勢を示すデータに冴えないものが多いことは事実である。ひとまずは、ユーロ／ドルの３１週線が下値サポートとして機能し続けるかどうかを週末時点で確認したい。

（０６月１５日　１０：１０）